特集

あの日から、それぞれの歩幅で

人とのつながりの大切さ

発災から、3カ月。まちでは、少しずつ復旧が進んでいます。仕事を再開した人、学校に戻った子どもたち、少しずつ日常を取り戻している人。
一方で、住まいや仕事が元に戻らない人もいます。

同じまちで暮らしていても、置かれている状況や、日々感じていることは一人一人違います。
家の片付けや仕事などに追われてきた3カ月。これまでどんなことを感じ、どんな人に支えられてきたのでしょうか。そして、これからをどう過ごしていくのでしょうか。

被災した人の声を聞きながら、今の「心」に目を向けます。

にぎわいを取り戻す

地震が起きたのは、営業中でした。閉店間際だったため、幸い店内にお客さんはいませんでしたが、棚が倒れるなど大きな被害が出て、建物は使用不可に。商品も生産者へお返しすることになりました。
一番心配だったのは、これから収穫を迎える農産物の販売先。特にブドウなどは収穫時期を迎えていたため、「生産者の皆さんが丹精込めて育てた農産物をどうやって売るか」が大きな課題でした。
そんな中、市などの支援を受け、福岡市で販売会を実施。



有限会社アグリパーク豊野
浦田 敬介（けいすけ） 代表取締役社長

地震の影響で休業中。道の駅不知火のほか、イベントなどに参加して農産物の販売を行っている。

まちに少しずつ日常が戻る一方で、店舗はまだ元に戻っていない。その差を感じることもあります。また、再開に向けて動く中で、不安や疲れを感じることもあります。
それでも、ここは地域の皆さんが集まり、生産者が消費者へ直接農産物を届ける大切な場所。周りから掛けてもらう「頑張って」という言葉や、応援してくれる人の存在が力になっています。焦らず、一歩ずつ。新鮮な農産物と笑顔を絶やさないアグリパーク豊野を復活させたいと思います。

8月下旬から9月にかけて、ブドウやショウガ、ナスなどを販売しました。連日多くの人に来場いただき、生産者の皆さんの農産物を消費者に届けることができたのは、大きな一歩でした。
販売会で直接励ましの声を掛けていただいたり、SNSを通じて応援のメッセージをいただくことも。遠くから気に掛けてもらえていることが、本当に励みになりました。
現在は、仮店舗の設置を計画したり、市外で販売したりと、再開に向けて動いています。



博多駅での販売会では、多くの人が農産物を買って支援

応援をチカラに。
再開に向けて、一歩ずつ。

家族で県外へ出掛けた帰り、高速道路で地震に遭いました。渋滞に巻き込まれながらもなんとか夜中に自宅の寺へ戻ることができましたが、断層で大きく盛り上がった地面を見たときは頭が真っ白に。
ぼうぜんとしつつも、地域のために動かなければという思いもありました。8年前から取り組んできた子ども食堂を通して、地域の拠点でもあったこの寺。発災2日後、知人の声掛けで炊き出しを始めると、日頃から関わりのある皆さんが力を貸してくれました。



延福寺住職
能令 顕真（のうりょう けんしん） さんご家族

小川町在住。妻と子ども5人、父母の9人家族。自身も地震で被災しながら、寺での炊き出しなどボランティア活動を行っている。

子どもたちにとっても、張り詰めた気持ちを少し緩める時間になったと思います。
私も妻も疲れを感じることがありますが、そんなとき、友人が料理を作って持ってきてくれたり、話をしたりするだけで、元気をもらえます。
日常を取り戻すには、時間がかかりますが、それでも、周りに支えられながら、少しずつ前に進んでいます。声を掛けてもらえるだけで力になる。今回の経験を通して、人とのつながりの大切さ、温かさを改めて感じています。



炊き出しでかき氷を手渡す能令さん

家族で支え合い、周りに支えられて。